

ほとんど知らない オーケストラの話

(第7回)

指揮者とは、その二

東京フィルハーモニー交響楽団
専務理事・楽団長
石丸 恭一

オーケストラの演奏の出来不出来は、たった一人だけ音を出すことのない指揮者にかかっています。

「カリスマ経営者」と言いますが、100人のアーティストを一つにして超絶な演奏をさせる指揮者はまさにカリスマでなければなりません。短時間でそれを成し遂げるために指揮者は音楽以外に様々な技を磨いて来ました。代表的指揮者としてA・トスカニーニと言うイタリア人のカリスマ指揮者が居ります。

彼の練習は厳格で、妥協を許さず、君主制的独裁的でわずかなミスも見逃さない。激怒すると、楽譜を破る、譜面台を壊す、指揮棒まで折ってしまうこともよくあり（折れた指揮棒で手を突き刺したこともあった）、最後には懐中時計を舞台に叩きつけ、踏み潰したそうです。しかしその後は平然とリハーサルを始め、後に悪意を引きずらない人柄でもあつたそうです。あまり何度も時計を踏み潰すので後に楽員が仔細に調べたところ玩具であったとも言われています。

日本にも山田和夫と言う同じタイプのカリスマ指揮者が居りました。小柄ではありましたが行動は強烈で、飛び上がって怒り、勢い余って舞台か

ら転落したことも度々ありました。それに対して楽員が反論をしようものなら「帰る！」と言ひ様、出口に向かって出て行ってしまいます。困った楽員が途中で「まあまあ、先生…」と止めに入り元に戻る事になるのですが。その後のある日、同様な事態が起こり、先生は「帰る！！」と出口に向かって行きましたが誰も止める者がいないのです。速足で出口の扉まで来た山田先生は、扉に触れること無くその場で足踏みをはじめました。一頻り足踏みをした後、くると踵を返し指揮台に戻り何事も無かったかの様にリハーサルは続けられたそうです。勿論止めなかったのは楽員が申し合わせての事だったそうです。

団体を意のままに動かす事は何事にも重要で難しい事です。オーケストラも現在のハラサメントの類が大手を振ってまかり通っていた世界であります。今では褒めて、煽てて、纏めていく。お客様にもその変化が解る時があります。それは演奏終了後の拍手です。以前は指揮者が拍手を受けるだけだったのですが、今は指揮者がまず楽員を立てせ楽員に拍手を求め、その後も一人一人を立てせて拍手を求めます。皆様の拍手こそ現代のカリスマです。